

研究区分	学部研究推進
------	--------

研 究 テーマ	海外交流協定校の教員を活用する研究指導支援の取組				
研究組織	代 表 者	所属・職名	国際関係学部・教授	氏名	飯野 勝己
	研究協力者	所属・職名	国際関係学部・教授	氏名	澤田 敬人
		所属・職名	国際関係学部・教授	氏名	吉田 真樹
		所属・職名	国際関係学部・教授	氏名	石井 由香
		所属・職名	国際関係学部・教授	氏名	米野 みちよ
		所属・職名	国際関係学部・教授 (現在 龍谷大学・教授)	氏名	森 直香
		所属・職名	国際関係学部・教授	氏名	佐藤 真千子
		所属・職名	国際関係学部・准教授	氏名	小窪 千早
	発 表 者	所属・職名	国際関係学部・教授	氏名	澤田 敬人

講演題目
海外交流協定校の教員を活用する研究指導支援の取組
研究の目的、成果及び今後の展望
本研究テーマのもとで令和6年度を最終年度とする第3期中期計画での取組の総括を行い、令和7年度からは国際関係学研究科に必要な国際的教育研究環境整備の一環として取組を進めた。 海外交流協定校の教員を活用する研究指導支援の取組には高い効果があることが令和6年度にはすでに明らかにされている。理由としては、1. 学生の研究を進めるために必要な、国際関係学を中心とする人文・社会科学を研究する交流協定校の教員を揃え、2. 複数の協定校と6名の交流校専任教員を学生に選択肢として提供し、3. 英語の他、スペイン語による支援の取組を学生は選べるなどの多言語環境の構築を積極的に進め、4. 学生に対して応募から終了までを円滑に進めることができるシステマティックな取組を提供し、5. 海外提携校との交流が学生自身の研究と密接にかかわり、修士課程の正規カリキュラムの範囲ではないものの在学中の特別に注力した取組として学生は学内外にアピールが可能になる点があげられよう。 令和7年度取組ではこれら1.～5.を拡充させることを目標とした。1.の研究分野では、海外の日本研究に寄せた文化社会学を追加し、学生からの選択の幅を広げた。2.の協定校と教員を増やす点においては、多年にわたる本学の交流協定校であるフィリピン大学より、アジア研究センター専任教員の協力があつた。3.の多言語環境の構築については、協定校の教員が英語でも日本語でも問題がなく、学生も英語でも日本語でも問題ないという、バイリンガリズム環境の構築に成功した。4.のシステマティックな取組については、募集について研究科の専攻ミーティングによる広報機能が昨年以上に有効に働いた。また、昨年度は本取組の研究協力者と研究指導教員が一致し、令和7年度は分かれたのだが、本取組の趣旨が浸透して研究指導教員による理解が進み、両者の連携が成功した。5.の正規カリキュラムの範囲外であることは、新たな専任教員の参加を計画するごとに研究科委員会で議案とすることで研究科の取組とし、学生には在学中の2か年の連続参加の希望があることを確認することでロイヤリティの高さが明らかになった。